

伊豆下田での同窓会

深山 英伍（昭32）

“泰平の ねむりをさますじょうきせん たった四はいで夜も寝られず” とはその昔、アメリカのペリー提督率いる黒船が初めて下田港にその姿を現して、日本中を揺るがした時の有名な詩。今年のクラス会はこの伊豆下田に決めました。時折りしもアメリカンジャスミンの花、今盛りと咲き乱れ、街の中はその甘い薫りがただよい、私たちが歓迎してくれている様でした。

伊豆と言えばまず魚の美味しいところ、気候温暖で数多くの有名温泉の湧出場所、文学的にも歴史的にも名所旧跡の多いところ、誰しも一度は行ってみたいと思うところ。東京から更に急行で3時間の道程、少し遠いかなと思いましたがこんな機会でもなければ滅多に行けないところと言うことでここに決めました。

あとは「伊豆踊り子号」で来る皆さんを待つだけ…二度に亘り駅頭に出迎えましたが一番ヶ瀬先生他11名、懐かしい面々皆元気な顔を合わせる事ができたとき、正直ホッとしました。まあ！よくも遠路はるばるご苦労さん！

夜は眼下に瑠璃色の海をのぞむ小高い丘の上に建つホテルの広間で、盛り沢山の海の幸を囲んでの和やかな宴会、会が盛り上がるうちに思い思い

にスナップ写真を撮ったり又記念写真を撮ったり。宴会のあとは一番ヶ瀬先生の部屋に集まり、夜の更けるのも忘れて語りあいました。ここで忘れていけないのが伊豆ならではの露天風呂、遠く沖合に点滅する漁り火をながめながらの露天風呂は格別。忘れえぬ旅の一頁を飾ることができたと思います。

翌日は雨模様の天気、昨年長の崎での同窓会は雨の中、せめて今日一日はと願いつつ2台のタクシーに分乗してホテルを8時30分に出発。まずは黒船を模った遊覧船で湾内を一周、そのあとペリーと日米和親条約を結んだ舞台となった寺、唐人お吉の墓所、吉田松陰がアメリカ渡航を企て潜んだといわれる岩穴、観光案内のタクシーに任せて随所を巡りながら伊豆高原のお花畑で花を前に記念写真を一枚。観光所を周り終えたところでお昼。昼食は金目鯛の姿煮、伊豆下田は全国で有数の金目鯛の水揚げ量の多いところ、名物と自負するだけあってその見事なこと、大皿の上に体長40センチもあろうかと思われる程の金目鯛がまると一匹。お店のお話では海がしけていて今日のは少し小振りだとか、いつもはもっと大きいのだそうです。味の方も格別でした。



今回のクラス会を締めくくるに十分なインパクトのある昼食でお開き。

これから富士五湖方面へ向かう人、一足先に東京にもどる人、私たちも一番ヶ瀬先生と下田をあ

とにしました。

来年は福岡の榊さんに幹事をお願いすることにしました。福岡での元気な顔での再会を楽しみにしております。

沖縄(H16年)と嬉野(H17年)での参学会

三浦 博史(昭33)

沖縄での参学会(平成16年11月8～10日)報告が前年度会報の原稿締切り(10月末)に間に合いませんでしたので、嬉野でのミニ参学会(平成17年6月12日)の分とあわせて報告させていただきます。

沖縄参学会には、私は病気で参加できず、ほかのどなたかに会報原稿を頼んでおくべきだったのに、その機を逸してしまいました。同窓会長の西脇君も他の世話役などで忙しそうだし、沖縄参学会の分については、西脇君から送っていただいた

参学会近況報告(平成16年12月1日)の内容から部分的に抜粋させて貰いました。括弧内の文がその部分です。

『11月8日から2泊3日の沖縄参学会は大城清吉氏の1年がかりの素晴らしいプランにより、17名(内、夫婦同伴2組)が無駄のない時間を楽しく過ごすことができました。ここであらためて大城氏に心からお礼申し上げます。また、大城氏は我々のお世話のみでなく、今回の行程を中心に旅



参学会 in 沖縄 平成16年11月8日 於 松乃下



参学会 in 嬉野 平成17年6月12日 於 大正屋

行者顔負けの写真入りパンフ「参楽会 in 沖縄」なる小冊子、とはいえ36ページに亘る代物を作っていただき、参加者全員に寄贈してくれました。残念ながら欠席者全員に差し上げることは無理ですが伝言板（欠席者の近況報告）に掲載された方にはお分けすることにしました。…』

なお、松浦君と江頭さんは夫婦同伴で参加して下さいました。会に出席できなかった私まで豪華なカラー冊子「参楽会 in 沖縄」をいただき感激でした。実際に訪れた観光地と沖縄雑感（再度のご来県のために）の沢山のカラー写真が解説付きで掲載されていて見ごたえがあり、しかも鮮やかな南国的な色彩は沖縄のイメージにぴったり。写真を見ているだけで、自分もクラスメートと沖縄参楽会に参加したような楽しい気分になりました。旅費なしで豪華な旅行気分を味わせてもらいました。大城君本当にありがとうございました。

平成17年度の長楽同窓会総会（6月11日）が長崎で開催されたのを機会に、その翌日、嬉野温泉・大正屋でミニ参楽会を行いました。準備段階から、当日の世話まで、西脇君が率先してやってくれました。定期総会のことだけでも何かと大変だったろうに、本当にご苦労様。ミニ参楽会には16名が参加。そのうち9名が前日の長楽同窓会総会にも

出席しました。ミニ参楽会には用事があり出席できなかった内堀君とも総会の懇親会で歓談でき、総会の懇親会がミニ参楽会の前夜祭のような役目を果たしてくれたようです。総会出席者も増えるし、これこそ一挙両得ですね。

いつものように、参加者と欠席された方々の近況報告に始まり、楽しい宴会となりました。やはり歳のせいか、お酒の量はみなさんだいぶ減ったようです。わが参楽会も「同窓会病気の話で盛り上がり」（高守さんの話）になってきましたが、盛り上がることで少しでも元気がもらえるのなら参楽会様々です。「参楽会にだけはぜひ行かせて欲しい」とご主人にはそのことで同意を得ているとの山本さんの話に、参楽会のクラスメートの絆の強さをあらためて感じました。私は海外旅行の予定があったので、宴会終了後失礼しましたが、ほかの皆さんは旅館の送迎バスで、旅館近くのホテルの名所にホテル見物に行き、その後、部屋で二次会を楽しんだそうです。ホテルの乱舞は見事だったとのこと。

次の長楽同窓会総会は北九州地区で開催されます。その機に辻君のお世話で参楽会を開く予定です。皆さんとの再会を楽しみにしています。どうぞお元気で。

古文書に触れて —出島の科学展から—

松尾 幸子（昭34）

平成12年10月18日皇太子殿下をお迎えして長崎市立博物館において『日本の近代科学に果たしたオランダの貢献「出島の科学展」』が開幕されました。日本とオランダの交流400周年を記念した特別展（10月18日～11月26日）です。関連刊行物として「出島の科学」長崎大学出島の科学刊行会編著、「出島のくすり」長崎大学薬学部編などがあります。

特別展に携わる薬学部の取り組みは大変だったろうと推察されます。第2章19世紀における医学、薬学、博物学と薬学の発展の部では130点が展示されました。その中に長崎市立博物館蔵の古い小さな紙片、『御返答書「薬草十二種植付の件」』、『お

触れ「唐蛮薬種植付に関する件」』の2点がありました。担当されたのは薬用植物園の北村美江先生（現環境科学部教授）です。北村先生は私よりずーっと後輩ですが、たまたま日本女性科学者の会のメンバーであったが故に交流の縁があり、また、私が古文書講座で市立博物館に出入りしている関係からこの文書の解説をお手伝いしました。

専門家は断片でもその価値が解るらしい。翻訳したものを見て興味を抱かれ、この度一つの論文として発表されました。〔薬用植物の導入及び栽培に関する史的研究1.『御返答書「薬草十二種植付の件」』についての考察〕北村美江、松尾幸子〕として薬史学雑誌第40巻第1号（2000）に掲載され

ました。私にとって無縁だった薬学分野でお役に立つとは思いがけないことであり、古文書を始めて日が浅いにもかかわらず解説翻刻したばかりに新しい発見に遭遇するとは何と幸運でしょう。

私は卒業後現熱帯医学研究所で研究室生活すること38年間、退職後とりあえず陶芸に手を出し、草花を植えたり、小旅行を楽しんでいましたが、旅先で右手首を複雑骨折、右手は全く使えなくなり陶芸は諦めざるを得なくなりました。そんな時、平成10年秋、長崎市立博物館で古文書講座（講師原田博二館長）募集の広報を見て、これならば目と耳があり、若いとき変体仮名を多少習ったこともあるので参加できるだろうと軽い気持ちで入会しました。取り組んだのは、唐人番日記や巡検御上使下向一件書留などいずれも江戸時代の長崎に関する文書です。唐人番日記は翻刻したものが長崎市立博物館報第40、42、43号に掲載するまでになり成果をあげることができました。

長崎はご承知の如く鎖国時代外国に開かれた唯一の窓口として貿易が盛んでした。長崎に輸入された薬草の中には朝鮮人参、沈香、大黃、泊夫羅、山茱萸、酸棗仁、甘草、杜仲、貝母、土伏苓などがあり、その他全国に広まった長崎一番というものにハム、コーヒー、チョコレート、ビリヤード、

バドミントン、ボウリング、フェルト、アスファルト、写真、近代印刷、汽車など枚挙に遑がない。長崎は原爆に遭遇し貴重な資料史料の大半は焼失しているものの残った史料の中には日の目を見ない文書類は多い。保存されている文書・断片からお宝が見つかる可能性は十分にあるでしょう。

もうひとつ出島の科学展で思い出されるのは展示物の借り受依頼に出かけられる大橋 裕先生、富永義則先生、田中 隆先生に同行し佐賀市にあるウサイエン製薬を訪れたことです。展示物16点を貸与されましたがこれは所蔵されている資料のほんの一部に過ぎません。蔵の中には石炭箱、りんご箱に収められた文書類が埃塗れに埋もれていました。ここにも未曾有のお宝が眠っていることでしょう。

いま、古文書講座では長崎代官所役人を務めた金井八朗翁備考録を読み始めたばかりですが、御薬園に関する項目があるので新しい発見があるかも知れぬと楽しみです。

右手首骨折は私の余生の運を変えたのでしょうか。退職するとき、わが黄昏設計図の中に古文書は描いていなかったのに。古文書の世界もおもしろいと思うこの頃です。

三葉会日田に集う

白土 宮人（昭34）

平成17年度の三葉会（昭和34年卒の会）が5月28・29日の両日、大分県の日田市で開催された。

五月晴れがずっと続いていたのに、突然その日だけ雨と予報され心配したが、幹事さんの一人が、「私は雨女ではない」と言い張っていて、これが正しかったのか当日は汗ばむ青空となった。

28日午後3時過ぎ、日田の豆田地区に博多駅からのバスが到着、ホテルに直行していたグループと合流し、18名全員（男性7名女性11名）が勢揃いした。1年ぶりの再会は騒がしい。それぞれ「お元気そうで」を繰り返しながらお互いの健康を讃え合った。しばらく散策の後、早速お土産を買い込んでホテルに移動。

今年の会のテーマは“浴衣を着て屋形船で鵜飼を楽しむ”となっている。

一風呂を浴びてロビーに集合。途中でオーッと歓声上がる。色とりどりの浴衣に着替えた諸姉の予想を越えた艶姿に対するもので、歓声へのはにかみが昔日の面影をみせて可愛い。

屋形船が川に出て宴会開始。初夏の澄んだ夜景が広がっていく中、爽やかな初老の紳士と華やかな諸姉の姿はさすがに貫禄、凜としていてこの中を川遊びの楽しい雰囲気盛り上がりしていく。

やがて篝火に照らされて鵜飼の船が4、5艘やって来る。鵜達が水面で忙しく浮き沈みして芸をみせてくれるが、篝火だけではよく見えない。

後ほど鶴匠に伴われ、ご挨拶の訪問があったが、鶴達は船端にツンと留まって人間には興味がないのか、この華やかな集団にも全く無関心の素振りであった。

川風が少し冷たくなった頃ホテルに帰還し、一部屋に集まって二次会となる。

それなりにまだ職を得て社会に貢献している方が多いようであった。夫婦二人でどうして過ごしている…？が大きな話題であった。一病息災が当然、前立腺の検査の話は実感を伴って面白い。お孫さんの最年長は高校3年生との事、うちの子はまだ独身なのにと聞こえていた。今度の運転免許の更新時は高齢者講習を受けなければならない事、これからまだ車を新しく買い換えるべきか…、話は尽きない。

翌日はサッポロビール日田工場の見学、新鮮なビールの試飲でプオーッと息を吐く。ここで1名が別方向に向かい、新たに1名が加わって歴史の町秋月に移動した。

秋月では名物の“川茸と葛きり”で昼食を済ま

せた。川茸は名物のわりには正体が不明でよく分からない。でもこの味は正体不明として皆さんには旅の新たな話題の1つに加わったに違いない。また諸姉には優しい色の草木染が人気であった。

その後九州道をひた走って、3時過ぎに博多駅に到着して解散した。

幹事さん達の話では、会場の下見に来た日、3月20日、福岡西方沖地震があり、道路が閉鎖されて帰るに帰れず、家の事が心配で…、との事であった。平成17年度の会とはとんでもないエピソードを伴っていたようである。

次年は金沢か能登との事、まだ流動的で次回幹事の特権で決められるようであるが、何処であっても楽しい事は歓迎で、新しい案内を待っています。

今年参加出来なかった皆さん、来年は是非参加して下さい。

幹事さん達、大変お世話になりました。

皆さんお疲れ様でした。



三葉会 平成17年5月28日 於 日田亀山亭ホテル

同 期 会 私 感

井上 明子 (昭35)

会場奥の舞台の袖で、桑山寿美子さんの手品が始まったのは、宴が開かれてまだ間のないときであった。

今日こそは何とかそのトリックを見破ろうと、懸命に見つめていた私の目の前で、3枚のカードに描かれた数字が次々に変ってゆく。

「もう、ネタは見えとるばい」

ちょっと遠慮がちにとぼす桑山良照さんのヤジは、むしろ応援歌だ。マジシャンの手元を懸命に追っかけていたはずの私は、早くもついていけなくなっている。

彼女のみごとな手捌きに幻惑されている間、3枚のカードには「祝」「45」「周年」の文字が組み立てられた。

05年10月1日。私たちは、長大薬学部卒業後45年を期して、長崎・南山手に建つ全日空ホテルに集って、再会の喜びにひたっていた。

それにしても、はるばると歩み来しものかな！

改めて周りを見まわすと、この長い時の堆積の中に、大学で学んだ知識と技術を基盤に実社会に貢献してきたという自負であろうか、価値ある人生を積み上げてきた人たちの持つ充実感のような静まりが、瀟洒なホテルの佇まいとよく溶けあっていた。

補正の薬学 命と励む

我ら立たずば 蒼生いかに

長崎への途次、広島から参加の元永育子さんと特急かもめの席を隣り合せてきたが、そこで彼女が細かに話して下さった、調剤に際して求められる万全の注意と細やかな心づかいについて、正直、ある種の感慨を抱いた。そして、この種の仕事に就いたことのない私は、いつも病院で手渡されるくすり袋を何げなく受け取ってくるばかりであったことを恥じた。また、もう随分以前のことになるが、同窓会からの帰途、複数の病院でくすりを処方されている患者さんの、その作用の重複を避けるシステムづくりに思いを傾けていることを熱

く語られた井上 治さんは、今回も出席されていたが、ゆっくり話をする機会を逸した。

ずっと病院薬剤部で仕事をされてきた渡辺三二四さんが、今度、介護施設を立ち上げられるという。時代の要請に応える有意義なお仕事であり、ここでも、薬学の知識や実務の経験が大きく活かされるであろう。

今回、出席の21名の多くが、まだ現役で仕事に携わり、長谷川宏明さんのように大学で後進の指導に当たっている人もある。

そんな中、高木 康さんが10月9日の広島に於ける日本薬剤師会学術大会で、平成17年度日本薬剤師会賞を受賞されるという報告が、木下敏夫さんからもたらされた。これは薬剤師に与えられる最高の賞なのだそうである。大学卒業後、一筋に歩んでこられたその歩みの着実さが、こんな形で顕彰される。これは、彼ひとりだけでなく、長薬同窓生みんなの喜びであると思う。そして、薬には、ただ、その恩恵を与えられるばかりの私のようなもの、その栄誉の末端に連なっている、と思うことを許されたいものである。

宴はたけて、先ほどからマイクを手に歌い語っているのは山本 剛さん。彼がかくも素晴らしいエンタテナーであることを、学生時代には知らなかった。デジカメやビデオを手に会場風景の撮影に忙しいのは、メカにつよい藤岡 健さんをはじめとする主に男性陣。私にとって卒業後初めての再会となった田川眞隆さんとは少しだけ言葉を交わしたが、佐伯寿美さんや足立 寛さんなどとは、お元気でしたか、との思いをこめた目礼を交わすにとどまったことを心残りに思う。幸い、関西からの北島四郎さん、関東の中尾哲朗さん、北九州の石飛昭汎さんとは、少しずつながら会話を楽しむことができた。

二次会もお開きになった後、ホテルの中の隠れ処に女ばかりが集って、おしゃべりに夜の更けるのを忘れた。

草野房子さん、荒川清子さん、どちらも学生時

代からの才媛ぶりは変わらない。西山由美子さんのイギリス・フランス長期旅行のお話、雲仙『福

田屋』を守っている福田葉子さんの奮闘ぶりなど、秋の夜長に話題の尽きることはなかった。



再出発 ―36年卒同期会（東京）に出席して―

有吉美恵子（昭36）

平成9年7月横浜を離れて以来、初めて会う同期生も、あと2～3年で70歳を迎えようとしている。20歳そこそこの頃には想像する事すらできなかった年齢だったのに、なってみれば何のことはない。途中経過がどうであれ、まだまだ若いつもり。退職後も年に一度は上京しているのに、相変わらず人雑みの多さと変化のはげしいビル街にはついていけない。30年以上も生活の場としてすごした都会なのに、その分だけ、大分の地にどっぶり根を生やしたのかな？

東京のアクセスの良さは最高。さすが東京。10月6日（日）日本橋コレドビル4階の「皆美」へ。もし、あの時、宇田さんへ電話していなかったら、東京でのスケジュールに同期会への出席は無かつたろうにラッキー。

今回の旅行は、私にとって特別でした。1月末に認知症だった母を送り、やっと24時間自由になったと思った矢先に、私がダウンして入院。2年前の悪夢が再び？ショックでした。幸いに単なる胃潰瘍とわかって安心したものの時間がたつにつれて一人身の気楽さの虫が退院するや否やもそもそ動き始め、まだ病院と縁が切れてない状態に

もかかわらず、お試し旅行となった次第です。

越中・黒田・酒井・白松さんの男性群と宇田・野崎さんの女性群の顔をみたら、出席しても酒は飲まないと決めていた信念もどこへやら、6か月ぶりに今日解禁。宴席では、今だから話せる学生時代の秘話が飛び出すやら話題の尽きる事を知らず、口も舌も滑らかに動いている様は、まさに遙か彼方に駆け抜けていった学生時代の気分と少しも変わっていない。年月を重ねた分だけ知識も経験も豊かで、時間の過ぎるのも忘れさせられました。最後にドンと大ぶりなおひつが目の前に置かれて何が始まるのかびっくり。これが島根県松江の味・鯛茶漬。普段食べる鯛茶漬と全然違い、ゆで卵を使うのです。イメージがわかないでしょうが、機会がありましたらお召し上がりください。美味しいですよ。

満腹の後にすることは、勿論参加者全員でエクササイズ。日本橋から銀座まで新しく進出してきた高級店等をウインドーショッピング。縁の無いものばかりだけれど、やはり銀座は歩くだけでも夢ははぐくまれる美しい街。立ち寄った喫茶店で季節はずれの陽気に涼をとりそれぞれ家路へ。野

崎さんと黒田さんと私の三人は更に京橋まで。途中ワイナックスに寄ってドイツ白ワインを試飲させていただきご満悦。ワインにうとい私ですら味の違いははっきり理解できたし、それよりも銀座ならではのと思える雰囲気が好きだった。一人別れて、もう一度銀座に引き返ししながら、宴席での会話を思い出していた。

現役の頃はほとんど病気もせず健康保険を利用することがなかったのに、62歳を過ぎてから、申

し訳無いほど消費した経験から「残りの人生はお釣の人生だ」と言った私に「これからが楽しい人生の始まり」と皆に反論された。言葉って面白いですね。後者の方には投げやりに聞こえる所が無い。一線を離れ、フルタイムで働かなくなってから見えてくるものが多いのかもしれませんが。これからは楽しい人生の始まりと行きましょう。また東京の同期生にエネルギーをもらいに行きますよ。

近 況 だ よ り

廣島須美子（昭36）

長かった夏のような暑さから開放され、やっと私の好きな秋が訪れました。近くにある室見河畔を犬と散歩しながら、高く、澄んだ秋空と心地よく吹く風に生きているささやかな幸せを感じます。

今、博多の町は「福岡ソフトバンクホークス」の敗退でがっかりしたようなムードが漂っています。昨年に続いての連敗なので、無理も無いことでしょう。

今年3月には、全く予想さえしない福岡沖地震を経験しました。大きな災害にはなりませんでしたが、しばらくその心身の後遺症が残った人たちがかなりいたようです。今なお、820人(267所帯)の人たちが避難生活を送っています。

相次ぐ世界の自然災害で、避難に合った大勢の人たちの惨状を見るたびに、怒りと悲しさを覚えます。「今、地球はどうなっているのだろう」「戦争などしているときではない」「早く環境や貧困問題に取り組まなくては…」と思うのです。

実は、2000年2月7日私は自宅で心臓発作を起こし、もう少しであの世に行くところでした。意識がなくなる前に「このまま死ぬのかな？でもまだ死ねない」と言っていたような気がします。その祈りが通じたのか、1時間近くたって意識が回復しました。

検査の結果「大動脈弁狭窄症」という弁膜症だということがわかりました。症状が酷くならないと表に出ないそうで、心臓発作を起こしたときに3割は死亡する確率だそうです。

検査入院をした後2ヶ月余り待って、弁置換の手術が終わり退院したのは7月でした。暑さと長い間の心身の疲れから、思いのほか回復するのに時間がかかりました。

10月に福岡で大学のクラス会がありました。地元でありながら何のお世話もすることなく、当日出席するだけで精一杯でした。生かされ、同級生に会えることができ感激しました。又、私の病氣回復に皆、心から喜んでくれました。いくつになっても、青春時代を共にすごした友の再会は楽しいものです。

その後、死の寸前から助けられて、何か宿題を持ち帰ってきた気がしてなりません。「何だろう？」と自問自答する日々が続きました。

ある日、「人は誰でも自分の人生の物語の一つは書ける」という言葉が心の奥の方から、ぽんと浮かび上がってきました。もともとその言葉が好きだったし、そう信じていました。

「私も自分の物語を書いてみようかな」と思い始め、パソコンの前に座りました。私の人生で一番ショックを受けたことから、書き始めることにしました。

それは、私が5歳のときに3歳の弟が疫病で一晩のうちに亡くなったことでした。今まで、原稿用紙5枚以上書いたことが無いのに、なぜか次々に懐かしい思い出があふれるように湧きあがって文章にしました。

後で読み返すと、さすがに書き慣れていないの

で、自分なりの癖のある文章でした。でも下手ながら自分の思いは伝えられたので、そのまま「心のおもむくまま」に書き続けました。最後は疲れ果てた感じで未完で終わりました。

とにかく一冊の本にまとめ上げることが出来、私や家族の身の回りの人に読んでもらいました。

いろんな批評をしてもらい、とても参考になりました。その中で「続きを書いて欲しい」という

要望があり、これに答えたいと再び書き始め今年、2年ぶりにやっと書き終えることが出来ました。タイトルは「希望の灯を求め続けて」で、戦前から戦後の60年の自分史になりました。

とりあえず、あの世の一步手前で持ち帰った宿題を果たしたような気がしています。残された人生はおまけの命なので、前向きに明るく生きていこうと思っています。

のんで、たべて、しゃべった3日間

池田 修一（昭37）

昭和37年卒業の私達は数年前から、全国の都市を持ち回りで同期の集いを開いている。今年は昨年の奈良に続いて鹿児島での開催となった。

（10月8日）新装なったJR鹿児島中央駅に20名が集合。（男子16名、女子4名）みんな元気な顔である。貸切バスが知覧に向かって走り出す。知覧武家屋敷を訪ね、その後知覧特攻基地記念館で若くして散った英霊を偲ぶ。

それぞれの感慨をもちながらバスは指宿屈指の宿『白水館』に向かう。夕闇の中、松林をぬけて玄関へ。待望の砂風呂の後はビールの乾盃。早速近況報告に入るが、みな、アルコールのピッチが早い。各人の声が届かない程のはしゃぎよう。60歳台が20歳台に戻った表情がまた捨てがたい。二次会の座敷では議論を始める者あり、家庭事情を話す者あり。碁、将棋に興じる者あり、何十年前の下宿生活が再現され、焼酎の在庫が底をつく。

（翌9日）大快晴。波静かな錦江湾に音もなく太

陽が上がる。朝食後、フラワーパークを散策、長崎鼻へ。右手に薩摩富士といわれる開聞岳がくっきりと浮かぶ。山麓公園で眺望を楽しんでから早目の昼食。「唐仏峡」のソーメン流し。竹の筒を落ちてくるソーメン流しを想像していた人達は丸い回転式のソーメン流し器でびっくり。冷水の中を泳ぐソーメン、鱈の塩焼き、鯉こく、にぎり飯などで、大いなる食欲をみせる。

香料園で生薬の授業を想いだし、池田湖を経て中央駅へ。ここで半数が別れ、居残り組は夜、黒豚シャブシャブと焼酎で怪気炎を上げる。天文館まで繰り出して、スナックへ乱入。薩摩切子のグラスで焼酎、焼酎、又焼酎。

（翌10日）残った、少人数でジャンボタクシーを借り切ってフェリーで桜島へ。海風が全身に心地よい。展望台では桜島の熔岩の迫力に圧倒され、遠く霧島連山、開聞岳を望む。絶景かな、である。市内に戻り城山公園、西郷南洲ゆかりの地を2、



3 訪ねる。西郷さんの墓地である南洲神社ではメンバーの一人が当時の軍服を着て記念写真を撮るというおまけまでついた。昼はやっぱり鹿児島黒豚ラーメン。こってり味でフーッ。

飲み、食べ、しゃべりながら。こいつ学生時代

と変らんなぁと思ったり、60歳台とは思えない元気に敬服。これじゃあ、しばらく元気で再会できそうだ。と肩をたたきあいながら3日間の旅を終えた次第。

昭和40年卒岐阜でクラス会

山縣 佳子（昭40）

「おもしろうて やがて哀しき 鵜飼いかな」

芭蕉

3年ぶりのクラス会を2005年8月6日岐阜長良川河畔ホテル「十八楼」でもちました。前回、「次は日本の中央で行おう」という事でした。岐阜にいる2名があれこれ考えた末に、暑い盛りですが鵜飼いと花火をセットしてみようということになりました。当日は16名（男6名、女10名）の参加でした。当日は近隣からの花火見学で混雑することもあり、少し早めに来ていただいたので、夕方までの時間に金華山公園の辺りを散策していただきました。夕方6時に貸し切り船に乗船し、川風を受けながら乾杯、夕食をしながら宵闇を待ちました。花火の打ち上げを知らせる合図とともに宵が迫り、鵜飼い船が漁り火をつけながら鵜飼いを

披露。そして夜空に次々と花火が上がり、船からの眺めを堪能しました。船を下りてから部屋に集合してまた飲み交わしながら互いの近況を報告しました。

前回と異なり、一応退職した人が大半で、再就職後の生活や余暇の楽しみ方など、ゆったりした気持ちで聞くことができました。まだ調剤薬局でフルに働いてる人、パートで働いている人もおり、それぞれが生き生きしているのが嬉しい限りでした。翌日はロープウェイで金華山山頂に行き、稲葉城から木曽三川や美濃平野を眺めたのち、斎藤道三、織田信長の菩提寺を訪ねました。豆腐ずくしの昼食を皆で会食、3年後には山口の方でしたらどうかということになりました。また元気で楽しい報告をもって集まりたいものです。

